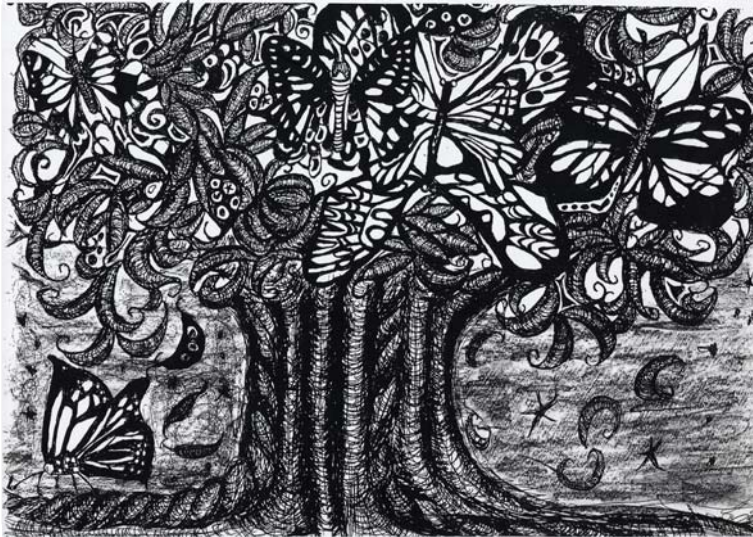


日本バプテスト連盟 沖縄浦添キリスト伝道所

OKINAWA URASOE CHRIST MISSION



がじゅまる



(宣教師の祈りの課題)

地域の朝とう会に出席しています。アメリカの宣教師から祈りの課題が出されました。「私の子どもがイラクに海兵隊として出兵しています。無事帰って来るように祈って欲しい」。そう祈ることは大切なことです。しかし、イラクの子どもたちはどうなるのか。

福音を恥としない

(沖縄の歴史には色がある)

平和活動をしているアレン・ネルソンはアメリカ海兵隊としてベトナム戦争に参加しました。沖縄で人を殺傷する訓練を毎日受けていました。「ベトコン」は殺してもいいと思っていました。ベトナムの戦場で赤ちゃんの命の誕生に会い、それから変わりました。

今は海兵隊員を軍隊から救出する活動をしています。そのネルソンさんは「日本は2つある。沖縄と日本だ」と言っています。

沖縄の歴史には色があります。エメラルド色の海、その海を真っ赤に染めた血潮。そして臭いがあります。

開会礼拝では、寺澤牧師(西原新生)が沖縄の歴史を語って下さいました。

「息子さんが無事に帰ってきますように。同じようにイラクの戦火の下に居る子どもたちの命が守られますように。そして、沖縄からの出撃がこれで最後となりますように。」そう祈りました。

(基地の問題)

軍用地主がおり、基地で働いて生活している人々がいます。国から大きなお金が下ります。その基地を受け入れ、沖縄から戦闘機がアジアに向かって飛び立つことを容認している沖縄の姿があります。加害者になってしまっている沖縄の姿。しかし、そうさせているのは日本であります。自立経済と言いながら実は自立されては困るのです。振興策と引き換えにいつまでも基地の島であり続けて欲しいと思う本土の願い。基地と教会は沖縄の大きな課題であります。

(北谷での少年事件)

今年の6月に北谷町で中学2年生の男子が先輩に殺害される事件がありました。その時に言われたのは「命の大切さを子どもたちに教えなければならない」という大人達の言葉です。それは最もなことです。しかし、そういう大人が基地を受け入れその利益で生活しています。基地は金網の中で、人を殺傷する教育と訓練をしています。米兵による事件事故が多発します。県議会の抗議の際に決まったように米軍から返ってくる言葉は「綱紀粛正に努める」。ネルソンさんは、本当は米軍は喜んでいるのだと言います。なぜなら、人を殺傷する教育の効果が出てきたからです。大人は沖縄の基地から戦闘機が1つの子どもたちに向かって飛び立つのを容認しているわけであり、そのような中で子どもに「命の大切さを教える」という矛盾があります。ある時は殺して良い命、ある時は大切にする命。利益によって使い分けられる命であります。子どもはそのことを見抜いているのではないのでしょうか。それは子どもに教える問題ではなく、実は大人が真剣に向き合わなければならない問題であります。

(福音を恥としない)

ローマ人への手紙1:16、パウロは「わたしは福音を恥としない」と言います。厳しい時代の流れの中で、生きていくのに多様な価値観がある中で、「命の福音」を第一にして生きる。本音で生きる。自分をごまかさずに生きる。第一のものを第一として生きる信仰を告白しています。正義と平和を実現するための手段は正しい方法でなければなりません。「平和の福音」「和解の福音」に向かう手段として、教会は「愛と非暴力」を大切にしていけるのではないのでしょうか。8月の平和学習ツアーで語って下さった元ひめゆり学徒の宮良ルリさん(77歳)は「沖縄戦を風化させないで欲しい」と語られました。全ての人々がシャロームの平和を願っています。「実に、キリストはわたしたちの平和であります。(Ⅰコリ2:14) 報復の連鎖

を乗り越えて、共に手を携えながら進んで行けたらと願います。

(2003年8月21日平和学習ツアー閉会礼拝)

沖縄浦添伝道所 牧師 岡田有右

「沖縄平和学習ツアー」に参加して

沖縄の3泊4日は非常に充実した日々で、瞬く間に過ぎて行きました。この中では本当に多くの学びがありました。沖縄戦のこと、ひめゆり学徒隊のこと、沖縄伝道のこと、基地のこと、自然と伝統と文化のこと。それぞれの学びに出会いがあり、それぞれの出会いには感動がありました。ツアーを終え、今の私には2つの思いがあります。1つは全ての学びは平和に通じること。もう1つは、沖縄の課題は、全て関西のわたしの課題でもあること。沖縄で得た多くの学び、出会い、そしてこの芽生えた想いを大切に、主と共に歩みたいと思います。(堺教会：青年 三宅 悠)

平和学習ツアーに参加し、沖縄戦の傷跡や、米軍基地を見て回りました。戦争中も現在も、日本政府のあり方はなんと愚かなのでしょうか。戦争に教育を利用して戦争のしやすい国を作る政治。本土を守る準備のために沖縄を捨て石とする作戦。現在では沖縄の基地の問題。どれもとてもひどいことです。特に教育に携わる者の一員としては、教育の利用は見過ごせない問題です。元ひめゆり学徒の宮良ルリさんのお話に「天皇陛下万歳」と言って死んでいったお友達の話がありました。きっとお母さんやお友だちの名前を呼んで死にたかったに違いないのに…。又、宮良さんは「お母さん」と言って死んでいく兵隊さんに、なぜ「天皇陛下万歳」と言って死なないのかと不思議に思ったことがあるとの話をしてくれました。死の間際のような時にすら、天皇を讃えて死なせるような教育。教育と言うものは、本当に恐ろしい程の力があると実感します。そしてまた、現在の日本も同じ道を歩もうとし

ています。まるで国家総動員法のような有事法制。そして、日の丸・君が代の国旗・国歌法制定。また同じような戦争をしようとしているのでしょうか。沖縄戦での悲劇は全く教訓となっていないのでしょうか。

現在、日本のどれだけの人が戦争について考えているのでしょうか。政治への無関心が広がり、政府の水面下の動きが気になります。このような中で、宮良さんのような戦争の悲惨さを証言してくださる方がいなくなってしまうたら、本当に日本はどうなるのかと思います。戦争を二度と繰り返さないように、私にできることはなんだろうか？力はわずかですが、平和をつくり出す者として歩み出したいと思います。きっかけを与えて下さった皆さまとの素晴らしい出会いに感謝です。

(堺教会：青年 武 桔梗)

平和学習ツアー、三日目の夜、元ひめゆり学徒である宮良ルリさんのお話を伺った。宮良さんが私の前にいること、それだけで私は涙がでた。それこそが、あの戦争で無事に生き残った証だからだ。彼女が存在していること、そのことが証言なのだ。彼女は、短い時間ではあったが、自分の体験した沖縄戦を淡々と語ってくれた。「鉄の暴風」と呼ばれる爆弾のこと、友だちが次々に亡くなっていっ

たこと、戦場では、自分の命のことしか考えない、人が死んでいようが関係ないこと。

彼女の話話を聴いていると、アガノスタ、イウのことを考える。地球上で戦後というものはない。アガノスタそしてイウ、米国が行った爆撃の下では多くの人間が虫けらのように死んでいったであろう。今も、劣化ウラン弾により放射能が蔓延し多くの人間が死に続けていると聞く。対イウ攻撃はブランチ管を通し、日本の茶の間に伝わる。しかし、その映像は、まるで映画のような、時には花火のように美しいものであったりもした。戦場の映像だとは思えないものだった。軍事施設だけをピンポイントで狙っており、あたかも、人は死んでいないような錯覚を受ける。しかし、実際はどうだったのだろうか。軍事施設を狙っても誤爆はあるし、一般市民を吹き飛ばして殺したことも多々あっただろう。一瞬にして、二度と戻ってこない命を吹き飛ばす。それが戦争だ。

米国のイウ攻撃を指示した日本、アガノスタに中村医師を派遣している日本のNGO、その上に爆弾を落とす米軍戦闘機の存在を許している沖縄、基地を沖縄に押し付ける日本...アガノスタやイウ戦争が私たちと繋がっていることだけは間違いのない事実である。宮良さんが最後にこうおしゃった。「今は、戦前の日本と同じ雰囲気です。有事法制は国家総動員法と同じです。平和は黙ってたらこないんです。」と。

聖書には、「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。(マタイ5:9)」と記されている。今、キリスト者である私たちがすべきことは何なのか、考えなければならない時が来ていると思う。

(沖縄浦添伝道所：青年 岡田安代)



元ひめゆり学徒である 宮良ルリさんをかこんで



海上基地がつくられようとしている辺野古の海

編集後記

岡田さんは行かないで！

～足を踏み続ける者～

オリブ園（老健施設）での月一回（第二日曜日午後）の礼拝と讃美の奉仕が始まりました。たくさんいるおじーおばーの中に1人だけ無表情なおばーがいます。「こんにちは」と話し掛けると介護師の方が「ダメダメ、標準語がさっぱりわからないから・・・」と。そうかウチナーグチ（沖縄語）か・・・近くでウチナーグチを教えてくれるところがあると聞いたので、参加しようと友達に言うと、「ウチナーグチを習っているウチナンチュウ（沖縄の人）は大和から奪われた言語、文化をなんとか必死で取り戻そうとしている、そんなところをその言語を奪ったヤマトンチュウに見られたくないと思うよ。だから岡田さんは行かないで」と答えが返ってきた。沖縄の痛みがわからない自分をそこに見出した。足を踏み続けている者であることすら自覚出来ない自分の鈍感さ、自分が何者なのかということをおぼされた。でもオリブ園のおばーと話す夢は暖めていきたい。

編集長：おかだふみこ

発行責任者：岡田有右

発行年月日：2003年9月24日

〒901-2121 沖縄県浦添市内間1丁目10-16-201
TEL/FAX 098-942-4775 牧師館 098-875-0707

捨て犬、捨てニワトリ、捨て車...

新会堂用地は新都心の街角にあり、8月10日に開通したモノレール「古島」駅より、徒歩4分。目抜き通りに面し、明るい場所である。ところが多くのものが捨てられ易い場所でもある。日常の家庭ゴミはいうに及ばず、犬、ニワトリ、車...真っ黒のニワトリは会堂用地を安心して走り回って暮らしています。牧師が花の水遣りにいくと（祈りはもちろん）嬉しそうに回りを走ります。車・・・トリちゃん、どうしよう？・・・地域の皆さんから愛されている場所であることを確認させてもらっています。

多くの方々の、お祈りとご奉仕で2003平和学習ツアーを終える事が出来ました。その記事をお載せ秋号をお届けします。真夏日、スコールの後、何度も180度の虹を見せてもらいました。それも二重です。皆さんと分かち合えたらなと思いましたが。沖縄からは虹が近いです。伊も近いです。基地で苦しむドイも韓国も近いです。美しい海が壊されつつある（在日米軍の75%に加えて新基地建設が真近くに迫り）沖縄で神さまの祝福の約束をうめきつついただきます。

F.O